

第 89 回 歴史リレー講座「大和川の文化史—難波津をめぐる問題—」 千田 稔氏 (R4.2.20)

大和川は大和盆地からの支流が数多く注ぎ込んでいる奈良の大動脈です。古墳時代には、これらの河川周辺に続々と発生した政治的領域が集まって大和という国家を形成しました。世界史における四大文明が長大な河川に沿って興ったように、大和川も日本の文化的創造に重要な役割を担ったことは間違いありません。この事実を知って、私たちは初めて日本文化の始まりが理解できるようになります。

江戸時代の元禄・宝永の頃に付け替えが行われるまでの大和川は、大阪の柏原で石川と合流後に大阪平野を北上したのち大阪湾に流れていました。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地図を見ると、現在の東大阪市のあたりに広がる河内湖が大阪湾と大和の飛鳥を結ぶ物資運搬の中継地だったと思われる。

さて、桜井市の纏向遺跡が邪馬台国(2世紀～3世紀)の中心地だったとする説は今のところ有力とはいえ、最近はこの説を疑問視する研究者が増えているのも事実です。私は纏向説支持派ですが、残念ながらこの説には決定的な証拠に欠けます。ただ、箸中山古墳(箸墓古墳)が卑弥呼の墓とは言い切れぬものの、時代的には合致します。また、日本初の前方後円墳である纏向石塚古墳の原初的な形は、岡山県倉敷市の楯築墳丘墓(2世紀後半～3世紀前半)に見られます。これがまず大和に伝播して纏向型前方後円墳が誕生した。その後たちまち全国に広がったので、纏向こそが最初の王権誕生地だというのが纏向説の骨子です。

原初的な形に関しては別の説も存在します。箸中山古墳東側のホケノ山古墳の内部構造が徳島県から出土した萩原1号墳の影響を受けているので、纏向型の原型は瀬戸内海の東から来たというものです。どちらの説にせよ、物資の運搬は瀬戸内海を利用し、河内湖の港で最初の荷物を降ろしたのでしょう。人々は乗り換えた船で大和川を遡って纏向へ向かったと想像します。その証拠に、湖南部の中田遺跡からは吉備由来の品が数多く出土しています。また、纏向と大和川が水路で結ばれていたことは、纏向遺跡から発見された運河遺構を見れば明らかです。邪馬台国の比定地がここだとすれば、大和川的一大港湾都市として発展したのでしょう。こうして、しばらくの間は大和川を中心とした政治的権力が継承されていきます。

変化が訪れるのは5世紀。応神天皇は軽島豊明宮(柏原)と難波大隅宮へ、仁徳天皇は難波高津宮へそれぞれ都を遷します。私の見解は、大阪湾沿いへの遷都は大和川河口付近(堀江)改修のため。のちに都が大和に戻っていることを考慮すれば、大規模工事に備えてのあくまでも一時的な遷都だった、というものです。実際、大阪市の上町台地(当時の海岸線沿い)で5世紀代の倉庫跡が発見されています。いわゆる「河内王朝論」とは一線画しますが、私の解釈のほうが理にかなっているのではないのでしょうか。

そして、7世紀から8世紀にかけて、再び大和川の時代を迎えます。推古天皇16年、小野妹子と隋の使節らは難波津の江之口に到着後、迎賓館へ案内されます。その後すぐ東に位置する大津港から大和川を遡る。三輪山近くの海石榴市では飾り馬で出迎えられ、続いて陸路で飛鳥の小墾田宮へ向かっています。しかし、この頃の大和には飛鳥と斑鳩を結ぶ筋違道(太子道)がありました。妹子らにしても、この道を選んだほうがより安全だったはずですが、部分的に未完成だった可能性もあります。

平城京遷都の際には大和川の支流(初瀬川、佐保川、秋篠川)を経て飛鳥からの物資が移送されました。ところが、天平12年(740)になると、聖武天皇は藤原氏絡みの事情から平城京を捨て、京都の恭仁京へ移り住みます。ここは水運に恵まれた淀川に繋がる木津川近くという好立地でした。天皇は紆余曲折を経て同17年に平城京に戻ったものの、その間5年もの年月を要した事実は大きいものです。

しかも、長岡京、平安京へと時代が移ると、淀川に比べて利便性に劣る大和川は淀川水系に大動脈の役目を取って代わられてしまいます。すでに、鑑真和上が平城京を訪れたときも水路ではなく陸路でした。とはいえ、大和川は邪馬台国から奈良時代までの長きにわたって、政治的文化的に計り知れぬほどの役割を果たしました。このことは歴史的に見て極めて意義深いことです。